

# アナバプテストのクリスチャンとは何か？

パーマー・ベッカー

## はじめに

キリスト教が始まった当初からアナバプテスト(再洗礼派)の考え方を共有するクリスチャンは存在しています。あらゆる教会や教派の中にアナバプテストのキリスト教信仰理解を共有する人びとがいるのです。アナバプテストであるということはひとつのクリスチャンのあり方です。ちょうどアングリカン(聖公会)やバプテストやカリスマ派のクリスチャンが存在するように、アナバプテストのクリスチャンが存在するのです。

「アナバプテスト」という呼び名は「再び洗礼を受ける者」という意味の造語です。それは 16 世紀の宗教改革時代に幼児洗礼を拒否し、その代わりに信仰告白に基づいた成人洗礼を互いに施しあったクリスチャンに与えられた名前でした。アナバプテストたちはメノナイト教会を含む自由教会<sup>1</sup>の伝統の先駆けとなった人びとでした。

アナバプテスト・メノナイトのクリスチャンには他のキリスト教信者と共通する多くの信仰があります。彼らは聖なるそして恵み深い三位一体の神、悔い改めと信仰を通しての恵みによる救い、イエス・キリストの人性と神性、聖書の靈感と権威、聖霊の力、そしてキリストの体である教会を信じます。ただアナバプテストたちはこうした確信を他の多くの人びととはいくぶん違う仕方で理解したのです。

アナバプテストたちはしばしば第三の宗教改革と見なされます。彼らはヨーロッパ社会の激動の時代に登場し、マルティン・ルター<sup>2</sup>、ウルリッヒ・ツヴィングリ<sup>3</sup>そしてジャン・カルヴァン<sup>4</sup>によって始められた宗教改革を完成させるという意味を持っていました。一般にアナバプテストの考え方を共有するクリスチャンは、日々の生活のなかでイエスに服従すること、キリストを中心とした共同体の一員であること、そして争いを非暴力的な方法によって克服することを何にも増して重視します。あなたはアナバプ

テストの心をもっていますか？

マルティン・ルターは救いが信仰を通して恵みによってもたらされるというはっきりとした理解(信仰義認)をわたしたちに示しました。しかしながら彼はコンスタンティヌス帝<sup>5</sup>やアウグスティヌス<sup>6</sup>によって始められた神学的な枠組みや考え方にだけ立ち戻るといふ過ちをあまりにも多くしています。同様にメノナイトのクリスチャンもメノー・シモンズや 16 世紀のアナバプテストたちが始めたことにのみ立ち戻ってしまうという過ちを時々しています。すべてのクリスチャンはあの時代や文化の中にあつてクリスチャンであるということが何を意味するのかを学ぶために 16 世紀に立ち止まってみる必要があります。しかし、そこからわたしたちは自分たちの時代においてクリスチャンであることの意味を探し求めるために、信仰を創られた方であり始められた方であるイエスに立ち戻ることが必要なのです。

ジャック・トラウトは『差別化するか死か』という著書の中で、個人にとつても組織にとつても自分を他から区別できることの重要性を述べています。「ある組織が他と異なる何かユニークな事柄を提供できないとすれば、その組織は死に至るだろう」とトラウトは言います。同じような記事が「ハーバード経営学評論」誌に掲載されていました。そこには「ひとつの組織を存在に導くユニークな中心的価値こそが『神聖』なのであり、それは決して変えてはならないものである」と言われています。

アナバプテストのクリスチャンにとって「神聖」な中心的価値とは何でしょうか。この冊子はそのことを鍵となる三つの主張から説明しようとするものです。それはわたしたちの信仰、帰属すべき所そして働きに深い影響を与えています。それは以下のことです。

1. イエスがわたしたちの信仰の中心である。
2. 共同体がわたしたちの生活の中心である。
3. 和解がわたしたちの働きの中心である。

この三つの主張はかつてハロルド・S・ベンダー<sup>7</sup>が 1943 年、米国教会史学会会長であった時に講演し、広く受け入れられた「アナバプテストのビジョン(The Anabaptist Vision)」をわたしたちの時代に適用したものです。その中でベンダーは自らの聖書理解に従って、次のように述べています。

1. キリスト教とは「弟子の道」である。それは日々の生活のなかで主イエスに服従することである。
2. 教会とは「兄弟姉妹であり家族」である。そのメンバーは自らをキリストに献げるだけでなく、それぞれが自発的に互いに献げ合う。
3. 主イエスに服従する者は愛と無抵抗の倫理を生きる。神によって変えられた人間として、彼らは暴力と戦争を拒否し和解者となることを自ら求める。

この冊子では先ずはじめにこうした中心的価値がどのようにして歴史の中で形成されてきたのか、そしてそれは今日の世界においてどのように適応されるべきなのかについて述べたいと思います。そしてその後でさらに読者の皆さんによる分かち合いのためにいくつかの大切な点において、アナバプテストとそうではない伝統を持つキリスト教会の立場を対照的に提示を試みたいと思います。その目的は真理を求める読者に対して「自分はアナバプテストの心をもっているだろうか？」という問いを問う機会を、あるいは少なくとも部分的にでもこの問いへの答えを考える機会を提供したいと思うからです。

パシフィック・サウスウエスト・メノナイト教会協議会の協議会担当牧師であるジェフ・ライトに対して特に感謝の意を表します。彼はこの仕事に多くの示唆を与えてくれました。またジョージア州のアメリクス・メノナイト・フェローシップの神学的に多様な兄弟姉妹たち、わたしの義弟セオドア・ウェザースやこの論文の最初の原稿を読んで熱心に批評してくれた読者たちに感謝します。学習の目的を優先するために初期のアナバプテストの積極的な面を強調し、否定的な面は最小限に留めたということを含

めて、勿論この冊子の内容の責任はわたしにあります。多くの福音派<sup>8</sup>のクリスチャンもまた自分の立ち位置をわたしが示した立ち位置のどこかに認めることになるでしょう。

## ■ 中心的価値 1. イエスがわたしたちの信仰の中心である。

およそ西暦 30 年頃、**主イエス**は一群の弟子たちを集めることからご自分の務めを始められました。3 年の間彼らはイエスと共に生き、食べそして働いたのです。弟子たちは主イエスが貧しい人たちを顧み、病んでいる人たちを癒し、目の見えない人たちに視力を回復させそして多くの人に教えたことを目の当たりにしました。この 3 年の間、そしてまた復活の後にイエスは彼らの生活と信仰の中心となっていくのです。彼らはイエスを自分たちの師である教師、救い主そして主として受け入れる信仰者となりました。

しかしながら彼らにとってクリスチャンになるということはたんに信仰する者や礼拝する者になること以上のことを意味していました。それは主イエスご自身の霊にあふれた弟子あるいは主に服従する者になることを意味したのです。このために彼らは自分たちの生き方をキリストに倣うものにしていきました。もし皆さんがこの最初の弟子たちに尋ねることができるならば、彼らはきっぱりと「**イエスこそわたしたちの信仰の中心だ!**」と答えるに違いありません。

こうして 250 年の間、初代教会のクリスチャンたちは主イエスの生き方、奉仕の務め、死そして復活に焦点を当てて信仰を守りました。ところがその後教会史にふたりの人物が登場し、このキリスト教信仰の中心的価値をくつがえすほどの変化をもたらしました。このことによってキリスト教はほとんど別の宗教になってしまったと言ってもよいほどです。そのひとり政治家でした。そしてもうひとは神学者でした。

**コンスタンティヌス**は当時のローマ帝国皇帝でした。彼は大変劇的な仕方**で**イエスの夢を見、そのことによってクリスチャンに対する迫害を止め

させました。313年にはキリスト教への寛容令を公布しました。まもなくキリスト教はローマ帝国の公認宗教となります。コンスタンティヌス自身は通常のキリスト教的な訓練を受けていたわけではありませんでした、また自分の生活の中でイエスに従うということもありませんでした。彼は意見が違ふという理由で妻と息子を処刑してしまうほど残忍な性格の人間でした。彼は復活したイエスの教えや模範、また人を変えさせる力というものを強調する代わりに、信仰を外から統制するような信条に代表される仕組みを強調したのです。

**アウグスティヌス**はコンスタンティヌスにやや遅れて登場しましたが後世に非常に重大な影響を及ぼすことになる神学者です。ある人びとは彼を古代教会最大の神学者であると呼ぶでしょう。しかし彼もまたイエスや最初の弟子たちのキリスト教信仰が持っていた考え方とはかなり異なる考え方をもっていたのです。アウグスティヌスやその信奉者たちはキリストの生き方や奉仕の務めに焦点を当てる代わりに、その犠牲の死に焦点を当てました。使徒信条はこの時代に現在の形にまとめられていますが、イエスの教えや奉仕の務めには触れていません。「**イエスこそわたしたちの信仰の中心だ**」と言う代わりに、アウグスティヌスやその信奉者たちは「**キリストの犠牲の死こそわたしたちの信仰の中心だ**」と言う傾向があります。

彼の神学の影響によって人びとは嬰兒が生まれながら罪びとであり、人間には善きことを行う力はないと信じるようになりました。また人が天国に行くか地獄に行くかどうかをあらかじめ神は決めておられる(予定説)とも信じるようになりました。教会が行う sacrament(聖礼典)やさまざまな儀式に対する信仰が中心的な意味を持ち始めました。およそ 1000 年の間、教会の司祭や司教や教皇の多くはキリストの死にばかり強調点を置いてきました。キリストの生き方や教えそして聖霊の臨在に適切な焦点が置かれませんでした。その結果、社会や教会の道徳は極めて低い水準にまで落ちてしまったのです。

西暦 1200 年から 1500 年にかけて、こうした状況を憂慮した人びとは救いやキリストの体に関して教会の理解が深刻な誤りに陥っていると気付き

始めました。ドイツ人の修道士であり、アウグスティヌスの神学を深く学んだ**マルティン・ルター**もその中のひとりでした。スイス人の司祭であったウルリッヒ・ツヴィングリもそうしたひとりです。彼らは宗教改革を開始することになります。

ルターは司祭や教皇たちが人びとに罪の赦しや煉獄からの救いを彼らの善行を基にして提供していたことや、そしてまた金銭による贖宥符の販売をとりわけ不快に感じていました。1517年10月31日、彼はドイツ・ザクセン選帝侯領ヴィッテンベルグ城の教会の戸口に**95**カ条の提題を書いた書面を釘付けしました。ルターはキリスト教信仰の本質に関して公開の討論を要求したのです。このことがきっかけとなって宗教改革が始まりました。

ルターもツヴィングリも教会とはキリストとお互いに対して献身する成熟した信仰者の集まりであると考えました。彼らは聖書が自分たちの信仰と行いの唯一の権威であることを承認しました。そして救いはただ神の恵みによるものであると主張しました。ただ不幸にも彼らの救いに関する理解はおもに罪の赦しを通して、また聖にして多くを要求する神の前に義とされることを通して永遠の生命を受け取るということに限定されていました。新しい生き方を信ずること、あるいは共同体においてお互いの新しい関係のあり方を信ずるということにはほとんど関心が向けられなかったのです。

ウルリッヒ・ツヴィングリに指導された人びとの中にはまもなくアナバプテスト運動を開始することになるコンラート・グレーベル<sup>9</sup>、フェリックス・マンツ<sup>10</sup>、ゲオルク・ブラウロック<sup>11</sup>がいました。彼らはスイスのチューリーッヒで定期的に聖書研究をするために集まっていました。南ドイツにはやがて同じ道をたどることになるハンス・フート<sup>12</sup>、ハンス・デンク<sup>13</sup>、ピルグラム・マールペック<sup>14</sup>がいました。その何年か後にはカトリック司祭であった**メノー・シモンズ**<sup>15</sup>がオランダで生まれたこうしたグループを指導することに尽力しました。

彼らの学びや働きによって、初期のアナバプテストは強い信仰を持つようになりました。彼らは自分たちの考えを組み立てるのに際してイエス・

キリストと最初の弟子たちに立ち帰ることを主張しました。ヘブル 12 : 2 のみ言葉、「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか」が彼らの多くにとって中心的な意味を持ちました。また第 1 コリント 3 : 11、「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そしてこの土台はイエス・キリストである」はメノー・シモンズのモットーとなりました。やがて聖霊によって力を受けた時、山上の説教が彼らのキリスト教的生活の規範となったのです。

アナバプテストは使徒信条やルターとツヴィングリが説いたことの多くを承認する一方で、その解釈のいくつかにおいてさらに考えを深めました。彼らにとっては「信仰によって義とされること(信仰義認)」よりもむしろ「新しく生まれ変わること(新生)」の方が重要な意味を持っていました。救いが神の恵みによってもたらされることを信じる一方で、彼らはそのことがイエス・キリストへの服従という応答を要求することを信じたのです。彼らは聖霊の力によって可能となる救いは人間の道徳的、社会的そして経済的な生活を改めさせるように人を導くと主張しました。もし皆さんがこうした最初のアナバプテストのクリスチャンたちに尋ねることができるなら、彼らも最初の弟子たちと同じく「**イエスこそわたしたちの信仰の中心だ!**」と答えるに違いありません。

アナバプテストの考え方を共有する現代のクリスチャンはこの 16 世紀のアナバプテストたちのイエスに関する理解を自分たちの毎日の生活のなかに取り入れようと考えています。それは少なくとも次の三つの大切な仕方によって表されるでしょう。

## 1. 日常の生活の中でイエスに従う

アナバプテストのクリスチャンにとって信じるということは教会の信条を承認したり、信仰によって義とされること以上のことを意味しています。クリスチャンになるということは日常生活のなかでイエスに服従するように聖霊の力を受けることを意味するのです。キリスト教とは弟子の道なの

です！ ドイツ語ではこれは **Nachfolge Christi** すなわち「主に従うこと」と表現されます。アナバプテストは 16 世紀の指導者のひとりであったハンス・デンクの次の言葉を承認するでしょう。「だれも日々の生活においてキリストに従って歩まない限り、キリストを真に知ることはできない」。

不幸にも多くのクリスチャンは救われた後でさえもまだルターのように自分たちがこうした変えられた生活を送ることができない希望のない罪びとであると考えています。ある人たちは「わたしは何も変わっていない。自分はただ罪を赦されたに過ぎないのだ」と言うでしょう。彼らは自分たち自身の生活の中で生きる姿勢が大きく変わっていないとしても、救いにおいては神の自分たちへの姿勢が変わったのだと考えます。しかしアナバプテストのクリスチャンにとっては、救いとは古い生き方から離れてイエスと共に歩みだすことを意味します。自分たちが考え方や生きる姿勢、行いを変えられてしまった故に、神との関係性、お互いの関係性、さらには敵との関係性においてさえも今までとは異なった生き方をしようとするのです。

彼らが聖餐を祝う時、アナバプテストの考え方を共有するクリスチャンはイエスが自分たちの身代わりとなって死んで下さったということだけではなく、今その主イエスご自身が自分たちの模範となってここに生きているということを重要視します。彼らはキリストの死と復活が神の愛の究極の表れであること、そして悪のさまざまな力に抗してイエスに従うものに勝利を得させるのだということを信じるのです。最初の弟子たちそして初期のアナバプテストたちと共にわたしたちは生ける「**イエスこそわたしたちの信仰の中心だ！**」とすることができるように促されているのです。

## 2. 聖書はキリストを中心にして解釈される

今日の多くのクリスチャンは聖書をいわば「平準化」<sup>16</sup>して理解しています。彼らは旧約聖書のモーセによって解釈された神のみ言葉を新約聖書のイエスのみ言葉と同等に権威あるものとするのです。このような聖書理解をする人びとはキリストの生き方とみ言葉のもつ重要性を軽んじてい



ます。彼らは旧約聖書を自分たちの政治的、社会的倫理の規範にそしてモーセの十戒を自分たちの個人的倫理の規範にしています。こうした聖書観は戦争や死刑そして社会正義といった問題に対する彼らの姿勢に大きな影響を及ぼしています。

またあるクリスチャンたちは聖書をディスペンセーションナリズム<sup>17</sup>の立場で解釈します。この立場では神の意志を知るにはどのディスペンセーションすなわち時代区分に聖書のみ言葉が啓示されたのが問題になります。不幸なことですがこの立場では一般に山上の説教や他の聖書の記事におけるイエスの教えへの服従はキリストの再臨の時まで延期されます。すなわち現在という時代区分においては、イエスは礼拝されはしますが服従されることはないということです。

初期のアナバプテストからわたしたちが学ぶことができることは、聖書はキリストを中心に理解され、解釈される必要があるということです。聖書はイエスの霊において読まれ、解釈されなければなりません。このことはイエスの教えが旧約聖書の教えをしのぐことが時にあるのだということを意味します。イエスご自身、「これはあなたがたが聞いてきたことである。しかしわたしは言う」と教えています。同様にヘブル書の著者は「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終わりの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。(中略)…御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって…」(ヘブル1:1~3)と語っています。

アナバプテストの心をもつクリスチャンは厳密な意味で逐語靈感論者ではありません。彼らは聖書のすべてをイエスの霊において解釈することを求めるからです。書かれた言葉(旧・新約聖書)とイエスの霊はいわば創造的な緊張関係を保たなければなりません。クリスチャンが**書かれた言葉(聖書)**をイエスの霊の上に置いても、**霊**を書かれた言葉(聖書)の上に置いても、それは危険な状態を生むことになるでしょう。み言葉と霊は共にしっかりと合わせ保たれなければなりません。

主イエスは聖書に対しても主であると言わなければならないのです。た

しかに聖書は神を知る知識の究極の源泉ですが、イエスはその神の完全な啓示であり、日々の生活における究極の権威なのです。この理解の故にアナバプテストのクリスチャンは根本的な導きと倫理を旧約の律法からではなくイエスから得るのです。台湾で宣教師として仕えた私の同僚であるピーター・ケーラーはかつて「もし聖書がイエス・キリストをわたしに教えてくれるのなら、もうそれで十分だ！」と言ったことがありました。

わたしたちが倫理的な問題に直面した時、それが個人的であれ社会的政治的な問題であれ、先ず指標としてイエスのみ言葉と霊にあたる必要があります。その後さらに深い背景や理解を得るために他の聖書の箇所を読むのです。もしも聖書の箇所が互いに矛盾するようなどきには、イエスを規範にして考えてみましょう！

### 3. イエスを救い主そして主として受け入れる

多くのクリスチャンはイエスを永遠の救い主としては考えますが、しかし彼を日々の生活においても主であるとする点に関しては弱いところがあります。その結果、彼らは日常においては雇用主や政治家、軍の将軍や大統領に服従してしまうのです。コンスタンティヌスやアウグスティヌス、ルターはキリストを信じる信仰による救いを強調しながら、政府を日常生活の多くの問題における最終的な権威あるいは「主」と考えました。今日の多くのクリスチャンもキリストの体において教えられるイエスの戒めよりもこの世の指導者たちの命令に服従しています。

神の国もこの世の国もわたしたちに全き服従を要求します。神は世俗の世界の中で悪を抑制し、善を行わせるために政府を立てられました。わたしたちはクリスチャンとしての弟子の道が許す範囲で政府に従うべきです。しかしもしイエスの道とカエサルとの間に葛藤が生じた場合、わたしたちは最初の弟子たちのように「わたしたちは人間の権威ではなく神に従う」と言う必要があります。

わたしたちは政府には従いますが、このことは政府に対してその命じることすべてに服従することを意味しません。わたしたちの最も深い忠誠は

イエス・キリストに属するのですから、政府の命令がイエスの教えや霊に反する時には政府への不服従という選択を行う必要もあり得るのです。この不服従において、わたしたちは政府の下す処罰をあまじく受けるでしょう。アナバプテストのクリスチャンは次のように考えます。

1. 日々の生活の中でイエスに従う。
2. イエスの霊に従って聖書を解釈する。
3. 最も深い忠誠をイエス・キリストに置く。

イエスは彼らの信仰の中心です。あなたはアナバプテストのクリスチャンですか？

## ■ 中心的価値 2. イエスにある共同体がわたしたちの生活の中心である。

主イエスは弟子たちがご自分を信じるだけではなく、互いに強い家族意識を持つように求めました。イエスはその宣教を開始された時にはじめになされたことの一つが共同体を作り出すことでした。イエスをご自分に加わるようにとペテロとアンデレ、それからヤコブとヨハネを招きます。まもなく弟子たちは増え、その中から 12 弟子が選ばれました。自分たちが教会と呼ばれる新しい共同体となったペンテコステの日まで彼らは共に学び、食事をし、旅をし、仕えました。使徒行伝 2：46～47 によると、最初の信仰者たちは「日々」会っていました。会衆全体が集う「宮もうで」だけではなく、「家で」すなわち家の集会や小グループでも互いに集まり、「パンをさき、よろこびと、まごころとをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた」のでした。

新約聖書の教会はこうした二重の文脈の中で交わりとして機能していました。全体の会衆が集うときには主要な教えや礼拝がなされ、その一方で家毎の小グループでは親しい雰囲気の中で彼らは学び、祈り、共に働いたのです。

こうした教会の姿を見た人びとは大きな場所だけでなく、固く結び

つき合った聖霊にあふれる共同体に集う信仰者たちを通してなされる神のみ業に驚嘆しました。もし皆さんがこのイエスの最初の弟子たちに尋ねることができるなら、彼らは「**キリストを中心にした共同体こそわたしたちの生活の中心だ!**」と答えるに違いありません。

不幸にもこの教会の本質はコンスタンティヌスとアウグスティヌスの登場と共に変わっていったのです。教会というものを共に聖書を学び、分かち合いそして祈るために集まる兄弟姉妹の家族と考える代わりに、**コンスタンティヌス**は建物と組織を持った大教会だけを重視しました。ローマ人たちが神々をまつるため神殿を建設したように、コンスタンティヌスはその母親の力づけと助力で、イエスが生きて働かれた土地にローマ神殿風の大聖堂をいくつも建てさせました。次第にこうした組織的な教会理解は広がっていき、ヨーロッパのほとんどの地方の中心には巨大な大聖堂が建てられることとなります。

**アウグスティヌス**とその信奉者たちはキリストの体に属している者とそうでない者とははっきりと見分けることはできないと信じました。「麦と毒麦とは一緒に大きくなる」と彼は言いました。また会衆をキリストの体として強調する代わりに、アウグスティヌスはミサのパンとブドウ酒をキリストの体として強調しました。その結果、大きな教会という文脈の中でミサにあずかることが教会における中心的な行為となっていきました。

こうして sacrament(聖礼典)に基礎を置く信仰が展開されました。原罪<sup>18</sup>を清めてもらうために、洗礼の sacrament を受ける必要がありました。現在の罪を赦してもらうために信徒はミサに出席しなければなりませんでした。煉獄から解放してもらうために教皇から贖宥符を買い求め、聖人たちに祈らなければなりませんでした。

小グループの共同体の中でキリストに属し、お互いに家族となるという考えは大きく失われていきました。教会がこの世の中で反体制の文化となる代わりに、この世に似たものとなっていきました。信仰者の共同体に牧会者として仕える代わりに、教職者は軍隊の司祭や政府の代弁者として仕えるようになりました。日々の生活の中でイエスに従いたいと願う者や共

同体で生活を願う者は修道士や修道女となりました。彼らは原則として男女の修道院の中で生活したので、一般の人びとに日々の生活の中でイエスを信じたり、共同体に属することは不可能だという印象を与えたのです。

マルティン・ルターや他の宗教改革者たちは当初、聖書の基礎の上に教会を改革する意図を持っていました。彼らはローマ教会の独裁的な権力から分離し、自由教会を形成することを望んでいました。彼らは成人洗礼とすべての信徒の祭司職(万人祭司、普遍的祭司職)を教えました。しかしローマからの自由を達成するにつれて、ルターとツヴィングリの多くの信奉者たちはその時代の過酷な封建制度からの解放を求め始めました。混沌が生じ、それは 10 万人以上が死んだドイツ農民戦争へと進んでいったのです。秩序を回復させようと努めるなかで、ルターもツヴィングリも国家の支配者の側に立つようになり、多くの農民たちの信頼を失ってしまいました。

農民戦争や他の問題のために、ルターとツヴィングリにとってもはや当初に意図していた改革を行うことは不可能となってしまいました。次第に彼らは改革の枠組みにおいてはコンスタンティヌスに、そして神学においてはアウグスティヌスに戻ることになります。このことは教会政治としては国家教会に、教会の組織としては大聖堂のあり方に、教会に加入する儀式としては幼児洗礼に、そして人びとを訓練する道具としては政府による剣の使用に戻ることを意味しました。その神学において彼らは人が生まれながらにしてすでに罪びとであり、罪に打ち勝つことは不可能であり、天国に行くか地獄に行くかは神によって予定されているというアウグスティヌスの伝統を持ち続けました。キリスト教界の多くは今日に至るまでこの伝統に従っています。

メノー・シモンズを含めて初期のアナバプテストたちはルターとツヴィングリに失望しました。こうした宗教改革者たちが回心した信仰者からなる自立した教会という当初のビジョンを断念したからです。アナバプテストたちはコンスタンティヌスによって始められた教会政治やアウグスティヌスによって始められた神学に戻って教会を改革することなど考えもしま

せんでした。彼らは新約聖書に立ち返って教会を改革しようと考えたのです！

迫害のために初期のアナバプテストのクリスチャンたちは聖書研究や分かち合い、祈りのために兄弟姉妹の家々に集まりました。初代教会のクリスチャンのように自分たちのただ中にキリストの存在を経験しました。そして喜びと偽りのない心をもって共に聖餐に与ったのです。人びとはイエスを自分たちの教師、救い主そして主と信じることで洗礼を授けられました。そしてお互いに強いつながりをもった共同体へと受け入れられました。

他の宗教改革者とは異なりアナバプテストのクリスチャンはたんなる罪からの解放ではなく、これまでの生き方と異なるように生きる力について語りました。赦しは自分たちと神との壁を取り除くだけではなく、お互いの壁をも取り除くものでした。主の晩餐を共に頂くことは神から赦され、また互いに赦し合うことによって初めて可能となる交わりの経験でした。

ルターは聖人や聖徒に関わるいかなる考えにも反対しましたが、初期のアナバプテストたちはむしろ互いが「聖徒のように生きる」ことを期待しました。特に指導者たちに対してはそうでした。彼らは忠実なクリスチャンとは変化を経験した人びとであり、罪を悔い改めて高い倫理的な生活を送ることを信じました。このような変化を遂げた生活は救いと聖霊の臨在を計る物差しであるとされました。もし誰かが日々の生活の中でイエスに従わずにノンクリスチャンのような生活に固執するならば、自らキリストへの献身を無にするものとされ、そしてそれによってキリストの体から破門されました。

初期のアナバプテストたちは聖書を先ず自分で学びそれから小グループに集まりました。そこでは聖霊の臨在が意識され、お互いに助言や勧めが行われました。こうした小規模の霊にあふれた聖書研究会において彼らは互いに真剣に向き合いました。それによってこの世にしっかりと向き合えるほど互いを強めていったのです。

アナバプテストたちの救いや教会に関する考え方は常軌を逸するものとみなされました。多くの指導者が投獄され、厳しい迫害にさらされました。

4000人以上の信仰者が水に沈められ、首をはねられそして火あぶりにされました。言い換えるならば信仰のために殉教者として殺されていったのです。

はじめの頃にはアナバプテストの間に多くの意見の相違もありました。ある指導者たちは世の終わりについて過剰な関心を向けました。一部の人は暴力を使用し始めました。たとえばドイツのミュンスター市のアナバプテストたちは選挙で選ばれた市評議会を12人の長老たちに取り替えると、一夫多妻制を導入し、新しい通貨を発行したうえで新しいイスラエルを宣言しました。悲劇的で血なまぐさい結末を迎えることになったこの少数派のことが強調され、アナバプテストとメノナイトのクリスチャンに対して否定的な評価が加えられました。これは一部の教会では今日に至るまで続いています。

アナバプテストのクリスチャンがどのように互いに関わり合いましたこの世に関わったかを見た人たちは驚嘆しました。自分たちはイエスに属するという意識をもち、お互いを強く支え合う生活によって敵意に満ちたこの世のなかで献身的かつ倫理的な、そして従来にない共同体として彼らは生きることができたのです。もし皆さんがこうした初期のアナバプテストのクリスチャンたちに尋ねることができるなら、彼らは最初の弟子たちと共に「**キリストを中心にした共同体こそわたしたちの生活の中心だ!**」と答えるに違いありません。

アナバプテストの心をもつ現代のクリスチャンは次の三つの特徴的な方法でキリスト中心の共同体を理解し、実践しています。

## 1. 赦しは共同体を形成する方法として理解され、実践される

共同体の中に働いている三位一体の神はわたしたちもまた共同体の喜びを経験するように求めています。イエスはわたしたちが命を持つように、もっと豊かに命を持つために来られました。このことはわたしたちが神と互いに対して和解を経験する時に可能となります。暖かい愛情のこもった

共同体意識が生まれ、すべての利益がそのために活かされるためには、わたしたちはこのキリストの体において悔い改めと赦しを繰り返し実践しなければなりません。

人間の中心的な問題は経済力の欠けでも教育の欠けでもあるいは権力の欠けでもありません。中心的な問題はわたしたちが互いに傷つけ合うということなのです。その最初の時から人間は個人であっても集団としても傲慢さと自己中心性そして不服従を通して神と互いを傷つけてきました。わたしたちの攻撃的な態度や行動が神との関係や互いの関係、わたしたち自身との関係や全地球との関係さえをも破壊しています。この問題にどのように取り組めば良いのでしょうか。

赦しは神との和解にとって必要なだけでなく、和解を受けた共同体の中においても必要なのです。攻撃や罪を解決する転機はその当事者が心から悔い改め、赦しを請う時に訪れます。罪の告白と赦しが神とそして互いとの交わりを妨げていた障壁を取り除くのです。キリストがもっとも強く望んでいることはキリストご自身と父なる神がそうであるように、わたしたちが互いに一致することです。

不幸にもキリスト教の外の世界においては罪の告白や赦しはほとんど無視されています。多くは罪の否定と自己防衛が誠実な告白に取って代わられるのです。赦しなしの罪の忘却が行われるのです。

## 2. 聖書は共同体の中で解釈される必要がある

多くのクリスチャンは訓練を受けた牧師、司祭あるいは教師が聖書を正しく解釈する能力を持つ唯一の人びとであると考えています。このため多くの場合普通の信徒は聖書の学びや研究から遠ざかっています。

またあるクリスチャンたちは聖書を自分流に解釈しようとし、不幸なことに個人が私的に聖書を解釈する時、たとえ聖霊の臨在があっても多くの場合混乱を招くような誤った理解に陥ってしまうのです。

アナバプテストの心をもつクリスチャンは聖書を個人としてもまた聖霊が導く共同体においても共に学ぶことが必要であると信じます。わたした



ちが互いに小グループや聖書研究のクラスまたは協議会で共に学ぶ時、聖書のみ言葉を一層はっきりとそしてより生活に密着して理解できるようになるのです。

### 3. 教会は共同体として建てられなければならない

教会はよく二つの翼を持った鳥に例えられます。ひとつの翼は礼拝を共にする大きな集団としての会衆です。そこでは超越者である聖なる神との垂直的な関係が強調されます。もうひとつは小グループです。そこではお互いの親密な水平的な関係が強調されます。教会ではこうした大きなグループと小さなグループの双方が生き生きとしたものであることが必要です。

コンスタンティヌス以後の教会は大規模な教会だけを強調してきました。その一方でアナバプテストは必要上から教会を基本的に小グループという背景において経験しました。その結果、アナバプテストたちの教会は彼らの神学によるのと同様にその形によっても形成されてきました。メノー・シモンズのような指導者たちは小さなグループ同士のネットワーク作りに尽力したのです。今日もっとも健康的な教会というのは健康な小グループのネットワークだと思います。

教会はわたしたちが助言を与えたり、勧めを受け取ったりする場であるとすれば、小グループでこそもっともそのことが良く経験できるはずです。もし教会が交わりや励ましを経験する場であるとすれば、これもお互いをよく知る 12 人程度かそれ以下の共同体でこそもっとも良く経験できるはずです。もし教会はわたしたちが互いの賜物を見極め、奉仕の働きに共に努める場であるとすれば、これもまた小さなキリスト中心の共同体においてこそもっとも良く経験できるはずです。大きな会衆ではなく、むしろこうした小グループこそが教会の基本的な構成単位として考えられる必要があると言えるでしょう。アナバプテストの心をもつクリスチャンは次のように考えます。

1. 赦しは共同体において不可欠である。
2. 共同体は聖書の正しい解釈にとって必要である。
3. 小グループは教会生活にとって本質的に重要である。

キリスト中心の共同体はわたしたちの信仰の中心です！あなたはアナバプテストの心をもっていますか？

### ■ 中心的価値3：和解がわたしたちの働きの中心である

初代教会のクリスチャンにとってクリスチャンになるということは、イエスを信じること、教会に属すること、新しい生き方をすること、この3つを合わせたものでした。

主イエスがこの世に来られたのは、人びとがキリストを信じ、神の家族の一員となり、新しい生き方をする力を与えられるためでした。最初の弟子たちは、この世の多くの人々が神と和解すること、そして人々が互いに和解し合うことを促しました。イエスは、この新しい家族の中で、人々が互いに敵対し合うことを予想したので、マタイ 18 章にあるような和解のステップをお示しになりました。対立する人間は、互いに一人一人と向き合う必要があります。もし敵対関係が解決されないならば、さらなるステップが必要になるのです。

山上の説教(マタイ 5～7 章)の中で、イエスは神の家族のなかで行動する指針を示されました。彼は弟子たちに、本当の平和というのは真実を知り、自らの悪を悔い改め、新しい霊の中で人と関わることによって実現されると教えられました。イエスは命じられています。「あなたがたが自分を愛する者を愛したからとて、なんの報いがあるのか。」「そのようなことは異邦人でもしているではないか。敵を愛し、迫害する者のために祈れ」(マタイ 5：43～48)。

イエスは、その公生涯の終わりに言われました。「父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす。」(ヨハネ 20：21) 「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名

によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」(マタイ 28 : 18~20)。

初代教会のクリスチャンが直面した最も大きな課題の一つは、ユダヤ人と異邦人との間の人種、宗教、文化の衝突でした。使徒たちは、さまざまな背景をもつ人々に仕え、多くの人々を神の家族に招き入れて、そして彼らを和解に導きました。使徒たちは、背景の異なる人々がどのようにしてキリストにある信仰を通して一つの体になれるのかという点において一致した見解を持っていました。その結果、教会は平和の文化を発展させていったのです。

このように初代教会の信仰者たちは彼らの考え方、人間関係、行為が変えられました。これはそれぞれが小グループに所属し、イエスを信じることにより、また聖霊の力により生じたことでした。最初の 250 年の間、クリスチャンは戦争に従事することを拒否しました。彼らは敵を愛し、殺してはならないと命じられていることを理解していました。イエスは彼らに迫害する者のために祈り、善をもって悪を克服するように教えられたのです。

使徒パウロはクリスチャンを和解の務めの使者とみなして、次のように言っています。「すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務めをわたしたちに授けて下さった」(第 2 コリント 5 : 18)。もし、あなたが初代教会のクリスチャンに尋ねることができるなら、彼らは「**人々を神と和解させること、互いが和解し合うことが私たちの働きの中心だ**」と言うでしょう。

不幸なことにコンスタンティヌスとアウグスティヌスは、こうした伝統を継承しませんでした。**コンスタンティヌス**は、キリスト教を支持し、キリスト教の聖職者を重用しました。しかし彼は自分の信念、帰属すべき所、行為において大きく変わることはありませんでした。コンスタンティヌスは、自らの軍隊を川の中に行進させ、洗礼を受けさせました。しかしおそらくその兵士たちのほとんどは彼らの信念、人間関係、生活様式を変えら

れてはいなかったでしょう。彼は人々を神と和解させ、互いが和解し合うということを求めず、政治的な利益のために人びとを支配することに専念したのです。

**アウグスティヌス**は、飲酒、強欲、かけごと、姦淫といった個人の道徳的な行為には強い関心がありましたが、平和をつくる人に変えられるということについてはほとんど語りませんでした。彼は、戦争はイエスが教えられた方法ではないと信じていましたが、いわゆる「正義の戦争」(正戦)の理論を考案しました。「正戦」論とはクリスチャンが一定の条件と状況において暴力や戦争に参加してもよいというものです。「正義の戦争」の理論はほとんどのクリスチャンの基本的な立場となっていました。

神学的には**ルター**、**ツヴィングリ**、**カルヴァン**らは、アウグスティヌスの歩みに従いました。彼らは、個人の罪の赦し、十戒の遵守を強調し、「正戦」論を受け入れました。信仰に関していくつかの新しい理解がなされはしましたが、この宗教改革主流の改革者たちは教会を根底から変えることはできませんでした。このために不幸にもクリスチャンとノンクリスチャンの行動の相違はほとんど区別できないものになってしまいました。

**メノー・シモンズ**や他の指導者たちの下にあった初期のアナバプテストのクリスチャンはキリストとの個人的な関係によって、また聖霊に満ちた共同体の中で服従することによって、行動がキリストに似たものへと変えられていきました。彼らは神との平和、互いの平和、敵との平和を強調しました。敵と戦うことを拒絶したのでした。聖霊の剣である聖書が彼らの唯一の武器でした。

アナバプテスト運動はその独自性において 16 世紀のカリスマ派運動、あるいは聖霊の運動と呼ぶことのできるものでした。アナバプテストの指導者たちは他の宗教改革者たちよりも聖霊について多くを語りました。彼らは聖霊が伝道のために彼らに力を与え、新しい信徒の行いを変える働きをするものと信じていました。

アナバプテスト運動はまた宗教改革における福音主義の運動でした。福音伝道の熱心さにより、主要な指導者たちは人々に神との和解、人との和

解を求めて、ヨーロッパ中を巡り歩きました。何千人もの人々がこの新しい運動に加わったのです。

アナバプテスト運動はまた社会正義を求める運動でした。指導者たちは折に触れて彼らの経済的、社会的関心を明らかにしましたが、それは封建制度の専制的な本質に対して反乱を起こしていた農民たちが共通して持っていたものでした。その結果この運動は農民たちの間に多くの信徒を獲得することになり、彼らはヨーロッパの多くの地域で小さな共同体に加わっていきました。

聖書を学ぶことと生活が変えられることに強調を置くことで、ほとんどのアナバプテストのクリスチャンは戦争や暴力に参加することは悪だと信じるようになりました。イエスの最初の弟子たちのように、彼らはたとえ西洋文明の敵（イスラム教徒であるオスマン・トルコ軍）がウィーンの城壁のそばに迫っても、軍隊に入ることを拒みました。迫害する者に反撃をするよりも、彼らは「ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅かさない」（第1ペテロ2:23）お方であるイエスの模範に従うことを選びました。

もし、**メノー・シモンズ**や初期のアナバプテストのクリスチャンに尋ねることができるなら、彼らのほとんどが初代の弟子たちと共に「**人々を神と和解させ、互いが和解し合うことがわたしたちの働きの中心だ**」と言うでしょう。

アナバプテストの心をもつクリスチャンは、今日、次の三つの考えにより働くように導かれています。

## 1. イエスを受け入れることが変えられた生活へと導く

アナバプテストの心をもつクリスチャンはクリスチャンになるためには、イエスを信じ、イエスの体に属し、キリストのような生き方をする必要があると信じています。これは、わたしたちの理性と心が変わることにより、そして聖霊によって新しくされる時にのみ可能となるものです。

神が主導権を取ってイエス・キリストをわたしたちと和解させ、神の家

族に招いてくださったように、わたしたちも他の人々が神と和解し神の家族に入れられ生活が変えられるように、彼らに福音を分かち合う主導権を取るべきです。このことが起こるようにわたしたちは絶えず人々にイエスを救い主として、主であるお方として受け入れるように招く機会を求めていく必要があります。

わたしたちは「キリストを理解できる量に応じて、自らを明け渡す」時にクリスチャンになるのです。イエスを受け入れることはわたしたちの考え方、友情、生き方を変えるでしょう。傷つき、疎外された人々は変えられるでしょう。それはわたしたちも神の家族に加えられ、そこにおいて変えられるからです。新しい人間関係と背景は、ほとんどすべてを変え、わたしたちを共に、まったくこの世と対照をなすところに連れていくのです。生活の精神的、感情的、身体的、社会的な側面、すなわち全体がキリストとの新しい関係、また互いの新しい関係によって変えられるのです。

## 2. 変えられた人々は「和解を考える」

変えられた人々は和解を考え、そして和解の務めに参加します。クリスチャンのなかには福音伝道が彼らの働きの中心であると考える人や、そうではなく平和活動や社会活動を働きの中心だと強調する人がいます。しかし奉仕におけるこの二つの重要な働きは、和解という概念のなかで共に生かされるのです。神の目的は「万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さった」(コロサイ 1:19) ことです。

わたしたちは神との争い、また隣人、同僚、家族との争いのなかにある人と出会うとき、即座に一方を訴え、どちらかの味方をしてはいけません。私たちは「和解を考える」必要があります。これは争いの原因を探ること、また、誠実な罪の告白、注意深い傾聴、非利己的な赦し、人間関係の修復によって、当事者の関係を正すことを助けるのです。

アナバプテストの心をもつクリスチャンは、様々な背景、性、人種、国籍をもつ人々が、キリストとの関係、また互いの関係を築くのを助ける

ために招かれていると感じています。問題を解決すること、関係性の和解を構築することは私たちの働きの中心にあります。しかしながら、わたしたちは、自分が変わらないで、他人に変わることを期待できないということを心に留めるべきです。他者が変わっていくのを助けようとする時、わたしたちは自分たちがどれほど変えられる必要があるのか、その自らの理解のもとにわたしたちは自分自身が成長し続ける必要があるのです。

### 3. 変えられた人々は平和のために働く

イエスに従う者に変えられたので、わたしたちは悪に対して他の誰よりも激しく戦う必要があります。しかし、わたしたちは違った戦いをする必要があります。イエスは言葉や気持ちのやりとり、非暴力的行動を用いられましたが、銃や爆弾は使われませんでした。いつもわたしたちはイエスを模範とし、イエスの霊にならうように召されています。山上の説教はわたしたちに指針を与えます。聖霊はわたしたちにこうした高度な弟子の道の訓練を受けて生きる力を与えてくれます。わたしたちの「態度はキリスト・イエスにもみられるものです」(ピリピ2:5)。わたしたちは使徒パウロと共に「わたしたちは、肉にあって歩いているが、肉に従って戦っているのではない。私たちの戦いの武器は、肉のものではなく」(第2コリント10:3~4)と言うように、試されているのです。

アナバプテストの心をもつクリスチャンが戦争や暴力にかかわることを拒むのは、「救い」をキリストに向かって変えられていくことと理解するからです。現代の戦争は、兵士に嘘をつき、憎み、破壊することを教えますが、イエスによって理性と心を変えられた人びとはたとえ重い権威によってそうすることを命じられても、そのようにすることを拒むでしょう。

歴史や経験は暴力がさらなる暴力を引き出すことを示しています。暴力は非暴力によってのみ、そしてその動機となる不正義を正すことによってのみ減らすことができるのです。

不幸にも何百万もの人びとが亡くなり、依然として亡くなっています。

なぜなら、コンスタンティヌス、アウグスティヌス、ルターの伝統の中でクリスチャンは和解をつくり出すものとして仕えるのではなく、むしろ戦争に参加しているからです。キリストに従う者として私たちは、わたしたちの敵を愛し、迫害する者のために祈り、悪に打ち勝つお方に自らを委ねる必要があります。「万軍の主は仰せられる、「これは権威によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」」（ゼカリヤ 4：6）からです。要約すると、アナバプテストのクリスチャンは次のことを信じています。

1. 回心は変えられた生活につながる。
2. 人は「和解を考える」べきである。
3. 人は生活のすべてにおいて、平和のために働くべきである。

**和解は彼らの働きの中心です。**あなたはアナバプテストの心をもつクリスチャンですか。

## 結 論

わたしたちはアナバプテストのキリスト教信仰理解をどのように考えるべきでしょうか。良心の自由、政教分離、そして信教の自由という民主主義にとって本質的な原則は宗教改革時代のアナバプテストに由来しているといわれています。彼らはそれをはっきりと宣言し、実践し、当時のキリスト教世界に挑戦したのです。

アナバプテストのクリスチャンとは何でしょうか。わたしはアナバプテストの見地から、キリスト教信仰の中心的価値を明確に述べてみようとしてみました。キリスト教の問題は必ずしも多くの教派があることではなく、互いから学び合うことを躊躇することにあるのです。アナバプテストのクリスチャンは神の主権と恵み、信条の重要性、政治への参加の方法に関して他の文化や伝統をもつクリスチャンから学ぶことが沢山あります。他の背景をもつクリスチャンは日々の生活の中でイエスに従うこと、キリスト中心の見方から聖書を解釈すること、キリストの主権を第一とすることと



いった点においてアナバプテストの伝統から学ぶことが多くあるでしょう。

以下の要約はあなた自身のキリスト教信仰理解をまとめるものとなるでしょうか。もしそうであるなら、あなたはアナバプテストの心をもつクリスチャンなのです。

### **イエスがわたしの信仰の中心である。**

- わたしは信仰の創造者であり、完成するお方であるイエスに目を留める。
- わたしはキリスト中心の見方から聖書を解釈する。
- わたしは日々の生活の中でイエスに従うことを求める。キリスト教は弟子の道である。

### **共同体がわたしの生活の中心である。**

- わたしは互いの赦しが共同体の働きを可能にすると信じる。
- わたしは自分たちの時代にあって聖書のみことばをふさわしく生かすために他者と共に聖書を学ぶ。
- わたしは小グループが健康的な教会の基礎であると信じる。

### **和解がわたしの務めの中心である。**

- わたしはイエスにある信仰を通して人々が神と和解するのを助けるという召命を受けている。
- わたしは伝道と平和をつくることが和解において互いに切り離せないものであると信じる。
- わたしはあらゆるかたちの暴力を拒絶し、戦争や紛争に対する平和的な第三の道を探る。

● 話し合いのための観点と質問

■ 中心となる価値1：イエスがわたしたちの信仰の中心である

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ」（ヘブル 12：2）

<p><b>多くのクリスチャンは強調する</b></p>	<p><b>アナバプテストのクリスチャンは強調する</b></p>
<p><b>1 キリストの死</b></p> <p>多くのクリスチャンは、神の聖性と罪の赦しの必要に焦点をあてる。彼らはイエスの生涯やその教えではなく、キリストの死と復活を強調する。キリスト教は罪の赦しである。</p>	<p><b>1 キリストの命</b></p> <p>アナバプテストのクリスチャンは、神の聖性と赦しの恵みだけではなく、イエスの言葉、奉仕の務め、霊における臨在という人を変革する力も強調する。キリスト教は弟子の道である。</p>
<p><b>あなたは「キリスト教は弟子の道である」という宣言に同意しますか。</b></p>	
<p><b>2 「平準化」された聖書</b></p> <p>多くのクリスチャンは、イエスよりもむしろ聖書の文書を最終的な権威としてみている。日常生活の指針はその状況にうまく合うような様々な聖書の箇所に基づく。すべての決定は、イエスの教えと霊に一致する必要はない。</p>	<p><b>2 「キリスト中心の」聖書</b></p> <p>アナバプテストは、聖書のすべての文書は靈感を受けていると認める。同時にイエスは神の完全な啓示であることを認める。イエスが意志決定における最終的な権威である。イエスは旧約聖書を完成させ、個人と社会の倫理双方の規範である。</p>
<p><b>「平準化」された聖書と、「キリスト中心」の聖書の違いを説明しなさい。</b></p>	
<p><b>3 政府を最高の権威とする。</b></p> <p>多くのクリスチャンは、政府の指導者は神の任命を受けており、たとえ彼らの要求がイエスの教えや彼らの良心の命令とは違っていても、政府に従わなければならないと信じている。</p>	<p><b>3 イエスを最高の権威とする。</b></p> <p>アナバプテストは、政府は神の任命を受けており、キリストへの従順が許す範囲のなかで従わなければならないことを認める。しかしながら、政府の要求は、イエスの主権を越えてはならない。</p>
<p><b>あなたにとって「イエスは主である」ということは何を意味しますか。</b></p>	

■ 中心となる価値2：共同体がわたしたちの生活の中心である

家ではパンをさき、よろこびと、まごころをもって、食事を共にし、神をさんびし、すべての人に好意を持たれていた。(使徒行伝2：46～47)

<p><b>多くのクリスチャンは強調する</b></p>	<p><b>アナバプテストのクリスチャンは強調する</b></p>
<p><b>1 上からの関係の赦し</b></p> <p>多くのクリスチャンは、互いの横の関係の赦しよりも、上からの神の赦しを強調する。赦しは個人の救いと永遠の命を受け取るための手段とみなされる。</p>	<p><b>1 横の関係の赦し</b></p> <p>クリスチャンは上からの神の赦しと、互いの横の関係の赦しの双方を必要とする。赦しは共同体をつくり出す、また互いの平和な関係性をつくり出す大切な手だてである。</p>
<p><b>赦しはどのように共同体に役立っていますか。</b></p>	
<p><b>2 個人による聖書解釈</b></p> <p>中世の教会が教会の指導者だけが正しく聖書を解釈できると主張したように、多くのクリスチャンは訓練を受けた教師や牧師に聖書解釈をほとんど依存してしまっている。</p>	<p><b>2 協力して行う聖書解釈</b></p> <p>アナバプテストは、個人による聖書の学びはグループでの学びと組み合わせられなければならないと考える。グループの学びにおいてメンバーは、イエスの霊の導きに自らを委ねる。</p>
<p><b>あなたは教会の中でどのように聖書研究をしていますか。</b></p>	
<p><b>3 神聖な場所で会うこと</b></p> <p>多くのクリスチャンは、礼拝する会衆を教会の基本的な単位と考える。教会は、建物や組織、あるいは日曜日の朝のパフォーマンスとして見られがちである。</p>	<p><b>3 小グループの中で会うこと</b></p> <p>アナバプテストのクリスチャンは、教会を家族と見ている。多くの健康的な教会は、小さなグループのネットワークとして組織され、その中でメンバーは交わり、学び、分かち合い、共に祈るのである。</p>
<p><b>小グループは健康な教会生活の基本となっていますか。もし、そうであるなら、あなたの教会の中で、小グループはどれほど大きな働きをもつでしょうか。</b></p>	

■ 中心となる価値 3 : 和解がわたしたちの働きの中心である。

「すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務めをわたしたちに授けて下さった。」(第 2 コリント 5 : 18)

<p><b>多くのクリスチャンは強調する</b></p>	<p><b>アナバプテストのクリスチャンは強調する</b></p>
<p><b>1 信仰による義認</b></p> <p>多くのクリスチャンは、神の聖性とキリストの贖いのわざを信じることによって義とされる必要を先ず強調する。回心は罪の赦しと天国への約束を意味する。</p>	<p><b>1 生活の変革</b></p> <p>アナバプテストのクリスチャンは、慈しみと恵みに富んだ神の本質と、心、霊、行動において変革される必要を強調する。回心は、信念、帰属する所、行動における変革を含む。</p>
<p><b>神の2つの性質は等しく重要です。どちらの性質をあなたは強調しますか。</b></p>	
<p><b>2 個人の救い</b></p> <p>多くのクリスチャンは、和解を個人的なものとする傾向がある。平和をつくり出すことや社会活動は、福音に欠かせないというよりはむしろ付加的なものである。</p>	<p><b>2 平和作りや社会活動</b></p> <p>アナバプテストは、個人的なものとの社会的なものとの双方の意味において、和解を考える。伝道と平和をつくり出すことは「和解」という言葉の中で互いに切り離せないものである。</p>
<p><b>マタイ 18 章にある仲裁のステップとは何ですか。</b></p>	
<p><b>3 兵役</b></p> <p>多くのクリスチャンは、良心やイエスの教えに反する行動を求められても、権威に従う。彼らは「贖罪の暴力」や「正義」論を信じている。政府が彼らにそうした行動を求めるとき、彼らは自ら進んで殺し、暴力行為をする。</p>	<p><b>3 兵役に替わる奉仕</b></p> <p>アナバプテストは、キリストへの従順が許す限りにおいて権威に従う。彼らは暴力への参加を拒むが、政府の要求の下に平和のために奉仕をする。正義や社会変革のための兵役に替わる奉仕が強く勧められている。</p>
<p><b>兵役に替わる平和づくりとは何ですか。</b></p>	

## 訳 注

### (1) 自由教会

特定の宗教を国家の公的宗教として世俗権力が公認するコンスタンティヌス帝以来の国教会制度に対し、信教の自由と政教分離の立場から組織された教会。従来その先駆者としてイギリス・ピューリタニズムを代表とみなす学説が有力であったが、アナバプテスト研究の進展により近年多くの学者はこの思想を 16 世紀のアナバプテストに遡ると主張している。

### (2) マルティン・ルター

ドイツの宗教改革者(1483～1546 年)。アウグスティヌス隠修道会会士、ヴィッテンベルグ大学神学部教授。1517 年、ローマ教皇レオ 10 世の贖宥符販売認可に対抗し、95 ヶ条の論題を公表した。これが宗教改革の口火となった。1521 年 3 月教皇により破門宣告を受けるが、ザクセン選帝侯フリードリッヒなどプロテスタント諸侯の支持と庇護を受け改革を推進した。旧新約聖書のドイツ語訳、『キリスト者の自由』など宗教改革的著作などにより大きな影響を与えた。1525 年のドイツ農民戦争では諸侯の側に立ち、農民の支持を失った。以後ルターに代表される宗教改革主流派は国教会制度を維持することで国家権力と深く結び付くこととなった。

### (3) ウルリッヒ・ツヴィングリ

スイスの宗教改革者(1484～1531 年)。1518 年チューリッヒの大聖堂教会司祭。翌 19 年のマタイ福音書講解説教により市内での宗教改革を開始。1525 年市参事会はミサ廃止を決議し、ツヴィングリの福音主義的改革は市当局の支持を得た。1531 年カトリック支持の諸都市に対抗した第 2 次カッペル戦役に従軍し、戦死した。彼の改革を支持し、やがてその方向性をめぐり決別することになる青年たちからアナバプテストの先駆けとなったグレーベル、マンツらのスイス兄弟団が誕生した。

(4) ジャン・カルヴァン

スイスの宗教改革者(1509～1564年)。フランスのノワヨンで生まれ、パリ大学などで神学、法学、古典学を学んだ。1533年福音主義プロテスタント信仰のゆえにフランスから亡命した。バーゼル、ジュネーヴ、ストラスブールをへて、最終的に1541年ジュネーヴ市に迎えられ晩年まで教会改革に尽力した。これによりジュネーヴはスイス改革派教会の中心となり、以後フランス、ドイツ、オランダ、スコットランドの改革派教会形成に大きな影響を及ぼした。1553年人文学者セルヴェトスを異端として告発し火刑とした。

(5) コンスタンティヌス帝

ローマ皇帝(280頃～337年)。父帝の死後、多くの有力な敵を破り帝位を獲得、首都をコンスタンティノポリスに定めた。後の教会の伝承では312年、宿敵であったマクセンティウスとの戦いで十字架と「これにて勝て」との幻を見、勝利したといわれる。このことがキリスト教庇護の契機となったと伝えられる。313年「ミラノの勅令」においてキリスト教を公認したが、彼はローマ帝国の国家最高神にキリスト教の神をおき、国家と教会の統一を図り、帝国の守護神としてキリスト教の国家宗教化を目指した。それゆえ帝国の統一のために教会政治に干渉し、325年ニカイア公会議を主催。アリウス派とアタナシウス派の論争に介入した。

コンスタンティヌスの母ヘレナもキリスト教を庇護し、オリブ山とベツレヘムにバシリカを建立した。母子とも東方正教会の聖人とされている。

(6) アウグスティヌス

北アフリカ・ヒッポの司教(354～430年)。古代西方教会最大の教父とされる。各地で古典学を学び、マニ教、新プラトン主義をへて386年、ミラノの司教アンブロシウスの影響のもとにキリスト教に回心した。その後郷里へ帰り司祭に叙階、391年司教となった。神学者としてマニ教、ドナティスト、ペラギウス主義者たちとの論争を通じローマ帝国の公認宗教となったカトリック教会の立場を擁護した。国家と教会、王権と教権の一致を土

台とするいわゆる「コンスタンティヌス体制」を神学的に基礎づけた。膨大な聖書研究や説教にくわえて、「正戦」理解を含む戦争の問題、教会と国家、原罪と義認、予定など彼が扱った問題は多岐に及び、後代のカトリック・プロテスタント教会双方に圧倒的な影響を与えた。

(7) ハロルド・S・ベンダー

米国メノナイト教会の教会史家(1897～1962年)。ゴーシェン大学、ドイツのテュービンゲン、ハイデルベルクの各大学、プリンストン神学校で学び、ゴーシェン大学にメノナイト歴史学会を設立した。1927年 *Mennonite Quarterly Review* を創刊し、その後のアナバプテスト・ルネッサンスと呼ばれる歴史神学の分野におけるアナバプテスト研究の進展に大きく貢献した。1943年米国教会史学会会長、1952年メノナイト世界大会議長。ながくゴーシェン大学の学部長を務め、多くのメノナイト派の神学者を育てた。

(8) 福音派

ここで言われている福音派とは現代の英語圏あるいは日本などで用いられている概念である。ドイツ語圏ではこれは宗教改革以来ルター派や改革派といったプロテスタントと同義語として用いられ、まったく事情が異なる。

1942年米国に全国福音主義同盟(NEA)が設立され、それまでのファンダメンタリズムや自由主義、リベラリズム双方と異なるキリスト教のあり方が提起された。この立場は聖書の最高権威性、イエス・キリストの主権、聖霊の働き、個人的回心の必要性、伝道の優先性、キリスト者共同体の重要性を強調する。ファンダメンタリズムほど原理主義を強調しない。この立場は特定の教派としても、またそれ以外にカトリックやプロテスタント各教派の内部においても存在する。さらに福音派内部においても個人の霊的な救いのみを語る立場から同時に社会正義や平和を強調する立場まで幅が大きい。神学的にもたとえば1970年代米国の「聖書論争」のように聖書の権威の理解において鋭い対立が内部に存在している。

(9) コンラート・グレーベル

スイスのアナバプテストの指導者(1498～1526年)。チューリッヒの旧家に生まれ、バーゼル、ウィーン、パリの大学で人文主義を学んだ。郷里に帰り、1522年ツヴィングリの信奉者となった。ツヴィングリが指導する聖書研究会に加わったが、やがて幼児洗礼肯定などのチューリッヒ宗教改革の不徹底さに反対するようになった。1525年1月マンツら同志と共に最初の信仰洗礼(再洗礼)を実施し、ツヴィングリと決別した。彼らスイス兄弟団は当局の激しい弾圧を受けながら、果敢に伝道活動を行った。1526年夏疫病のため病死した。

(10) フェリックス・マンツ

スイス・アナバプテストの指導者(1500～1527年)。チューリッヒの下級聖職者の子として生まれた。パリ大学でヘブル語などを学び、ツヴィングリの信奉者となった。やがて自覚的信仰に基づく国家から自由な教会形成をめざしてグレーベルと共にツヴィングリと決別した。度重なる逮捕・追放にもかかわらず伝道活動を続け、1527年1月チューリッヒ・リマト川で水死刑に処せられた。プロテスタントの手による最初のプロテスタント殉教者となった。

(11) ゲオルク・ブラウロック

スイス・アナバプテストの指導者(1492～1529年)。チューリッヒの司祭であったが、聖書研究を通してアナバプテストに転じグレーベル、マンツらと共にスイス兄弟団の有力な指導者となった。チューリッヒ近郊のツォリコン村周辺に伝道し、150名以上からなる最初のアナバプテストの教会を組織した。

1527年チューリッヒから追放され、ヨーロッパ各地を伝道した。多くの信徒を獲得し、モラビアのアナバプテストの共同体形成に尽くした。ハプスブルグ家によって捕らえられ、火刑に処せられた。



(12) ハンス・フート

「オーストリア再洗礼派の使徒」と呼ばれたアナバプテストの伝道者(1490～1527年)。大学教育は受けなかったが、製本・印刷業を通してルターの宗教改革を支持、農民戦争の指導者トマス・ミュンツァーとも交流があった。やがてアナバプテストに共感するようになり、ハンス・デンクから信仰洗礼を受けてからは南ドイツ、オーストリアを伝道し多数の回心者を得た。フープマイアーら国家教会的なアナバプテストと論争した。強烈な終末思想と再臨信仰を持ち、こうしたフートの信仰理解を討議するためにも1527年開催されたいわゆる「アウグスブルグ殉教者会議」に参加した。この後に捕らえられ獄死した。

(13) ハンス・デンク

ドイツ・アナバプテストの指導者(1500～1527年)。インゴルシュタット大学で人文教育を受け、バーゼルの宗教改革者エコランパディウスに師事した。その推挙でニュルンベルグの学校教師となったが、南ドイツのアナバプテスト運動に共鳴し追放された。アウグスブルグ近郊で伝道に従事し、1526年フープマイアーから成人洗礼を受けた。各地の再洗礼派共同体を励まし南ドイツを代表する指導者となったが、1527年の「殉教者会議」後の迫害と健康の悪化から運動から離れた。転向を表明し、バーゼルのエコランパディウスを頼り同地で死去した。

(14) ピルグラム・マールペック

ドイツ・アナバプテストの指導者(1495～1556年)。すぐれた土木技師であった。1522年頃ルターの宗教改革に共鳴し、やがてアナバプテストに転じた。ストラスブルグ市政府に技師として職を得、公務を続けながら同地の再洗礼派の有力な指導者となった。1532年同市を追放されたが、1544年以降はアウグスブルグに居住し各地の再洗礼派共同体を支えた。専門の神学教育は受けなかったが、カトリック、プロテスタントの神学者との論争を通してアナバプテストの神学形成に重要な貢献をした。彼は旧約聖書に対して新約聖書の優位性・キリストの規範性を主張し、スイス兄弟団以

来の神学理解を明確にした。

(15) メノー・シモンズ

オランダ・アナバプテストの指導者(1496～1561年)。フリースランドのヴィットマルスムで生まれ、カトリック教会の司祭となった。平凡な司祭であったが、1534年の南ドイツ・ミュンスターの蜂起を契機にアナバプテストに転じ、絶対平和主義に立つ再洗礼派の再建に尽力した。激しい迫害のもとで散らされた人々を集め、教会訓練を重視し、各地の再洗礼派共同体をキリストに従う信仰者の交わりとして形成した。伝道は20年に及び、ほとんどを地下活動の中で過ごした。メノーの献身的な働きによってアナバプティズムは立ち直ったとって過言ではない。アナバプテストはやがて「メノーの輩」と嘲りをもって呼ばれるようになったが、それがメノナイト教会の名の由来となった。

(16) 「平準化」

旧約聖書を新約聖書と同等の権威を持つものとして同列に考える聖書観。たとえば宗教改革者たちは旧約聖書の聖戦からクリスチャンの戦争参加を肯定する。また割礼の類比として幼児洗礼を肯定した。

アナバプテストはこうした立場をとらず、旧約聖書を正典として重んじつつもイエス・キリストが聖書解釈においても究極の権威、規範とした。具体的には山上の説教に教えられているキリストのみ言葉、キリストの生き方から聖書を読むこと、これに対立する聖書の記述に対してはキリストが優位に立つことを教えた。こうして彼らは信仰に基づく洗礼、絶対平和主義、隣人愛を実践した。

(17) ディスペンセーションナリズム

19世紀イギリスのプリマス・ブレズレンの伝道者ダービーが提唱し、アメリカのスコッフィールドらによって広められたキリスト教歴史観。人間の歴史を7つの時代区分(ディスペンセーション)に分類し、それぞれに神は固有の原理をもって人間を取り扱うとする。時代区分ごとの原理は違う

時代には適用されない。そのためこの立場では現代にキリストのみ言葉や教えを適用させることは重要ではない。それはやがてくる終末と審判の後に成就されるものであるからである。ディスペンセーションナリズムは強烈的な再臨信仰と審判待望をとまない、ファンダメンタリズムや一部の福音派に影響を与えている。

この立場の背景に聖書的歴史観よりもドイツ観念論のヘーゲルの歴史哲学の強い影響を認める見解もある。

### (18) 原罪

アウグスティヌスによって提唱され、完成させられた罪概念。人間はアダムとエヴァの犯した不従順、神への反抗によってもたらされた全面的な墮落を生まれながら遺伝的に受け継いでいるとする。生まれたばかりの子ども救われない罪人とされ、アウグスティヌスはこれを擁護するために先天的な障害をもって生まれる子供の存在を例としてあげさせた。原罪思想は幼児洗礼の重要な根拠となったが、このことにより国教会体制および教会による人々の精神的支配に神学的根拠を与えた事実を忘れてはならないだろう。

この教理は西方教会のカトリック、プロテスタントには継承されたが、東方正教会はこうした教理を持たない。アナバプテストは人間の罪を厳しく問い、悔い改めと新生を強調したが、遺伝的に相続される罪としての原罪の教理は拒絶した(エゼキエル 18:20、マルコ 10:13~16、第1ペテロ 2:2)。

## 訳者あとがき

本冊子は米国メノナイト教会の宣教団体メノナイト・ミッション・ネットワークから出版された、パーマー・ベッカー(Palmer Becker)著 What is an Anabaptist Christian?(2008年)の全訳です。原著はミッション・ネットワークが発行している「神の宣教(Missio Dei)」シリーズの一冊として出版されました。

著者のベッカー教授はゴーシェン大学、メノナイト聖書神学校、リージェント大学、フラー神学大学などで学び、米国メノナイト教会で牧師、宣教師として奉仕しました。その後カンザス州のヘストン大学(メノナイト)の牧会学の教授を長く務めました。リージェント大学、フラー神学大学は共に学問的に優れた福音派の神学校として有名ですが、このことは著者がメノナイト教会以外のキリスト教会、特に北米の福音派の立場や神学に精通していることをうかがわせます。こうした背景も本冊子の内容を豊かにしていると思われまます。

今年の春に北海道メノナイト教育研究センターの主事会の席でメリー・バイラー宣教師から本書を紹介され、一読してすぐに翻訳を思い立ちました。小さな冊子ですが著者の牧会者、神学者としての長年の経験と学識が随所にあらわれています。何よりも著者自身のキリストの弟子として生きようというアナバプテスト・メノナイトの真摯な信仰が伝わってきました。著者はキリスト教信仰とは「弟子の道」であり、その三つの中心的価値に、

1. イエス・キリストがわたしたちの信仰の中心である
2. 主にある共同体がわたしたちの生活の中心である
3. 和解がわたしたちの働きの中心である

をおいています。簡潔にしかも実には的確にアナバプテストの信仰と神学をとらえていると思います。たとえば「和解」を実現することにおいて伝道と平和をつくりだすことは切り離せないわたしたちの務めであるという著者の指摘は、日本の教会にも見られる「福音派(教会派)」と「社会派」の不幸な分裂を戒めるものでしょう。わたしたちは平和(シャローム)の神、平和の君を宣べ伝えるように召されているのです。

翻訳は桃野 泰子さんと共同で行い、最終的に文体の統一と訳注の作成を小林 良裕が行いました。高校教師として多忙ななか翻訳に加えて出版準備をして頂いた桃野さんに感謝いたします。またメリー・バイラーさんからは翻訳にあたって丁寧な助言を頂きました。感謝いたします。

この冊子が「弟子の道」を共に生きる兄弟姉妹の皆さまの学びと宣教の働きに資することを願いつつ。

2009年9月  
訳者

---

---